様式第４号（第11項関係）

審議会等の会議の記録

審議会等の名称	令和４年度第３回西脇市まちづくり推進審議会
開催日時	令和４年10月31日（月）午後７時00分～８時40分
開催場所	西脇市役所　大会議室
出席委員の氏名又は人数	平田富士男会長、松尾憲子委員、藤井琢己委員、藤原悟副会長、松山秀樹委員、井上浩代委員、藤井裕子委員、清水賢一委員、野村直樹委員、濱崎美千代委員、松本美千代委員、李貫一委員　計12名
欠席委員の氏名又は人数	森川元良委員、藤原俊子委員　計２名
出席職員の職・氏名又は人数	都市経営部長　渡辺和樹、まちづくり課長　高瀬崇、まちづくり課主査　二若直也、まちづくり課職員　野村悟史　　計４名
公開・非公開の別	公開
非公開の理由	―
傍聴人の数	―
議題又は協議事項	１　報告事項 審議会等の開催状況について ２　協議事項 まちづくり活動の活性化方策について

会議の記録（概要）

発言者	発言内容等
	１　開会 **２　会長あいさつ**
事務局	**３　報告事項** **審議会等の開催状況について** 資料１「令和３年度に開催された審議会等の開催状況等一覧表」に基づき、事務局から説明
事務局 会長	**４　協議等** **まちづくり活動の活性化方策について** 資料２「まちづくり活動の活性化方策について」に基づき、前回の振返り及び本日の協議内容について事務局から説明 前回の内容を振り返ると、活動団体同士の交流やまちづくり活動者のすそ野の拡大が、まちづくり活動の活性化やスキ

	ルの向上に繋がるということであった。今日は具体的な支援策の協議を行いたい。
事務局	事務局が検討したまちづくり活動団体への具体的な支援策案を説明 ・まちづくり団体が手軽に情報共有できるツールの整備 団体同士の交流に役立てるため、ＳＮＳを活用し情報を共有するツールを整備することができないか。 ・イベントへ活動団体紹介ブースの出展 多くの人が集まるイベントにまちづくり活動団体の活動内容の紹介や実際に活動ができるブースの出展を検討してはどうか。既存事業を活用することで、人を集めることに労力をかけずに啓発が可能となる。
会長	支援策案として、団体同士の交流が促進できるようなＳＮＳの環境を整備すること、つまりまちづくり団体同士がひとつのプラットフォームの上でダイレクトに情報共有できる環境を整備するということであった。 次に、まちづくり活動者のすそ野を拡大するため、今まで活動を知らなかった人などが多く集まるような市主催のイベントに出展して、そのような人達の目に直接触れてもらうということであった。市の案は、今回の議論のたたき台であるため、他の意見もお願いしたい。
委員	交流の場の設置はとてもいいことである。活動されている方を集めて、パネルディスカッションを実施してはどうかと思う。活動における苦労話などをテーマに実施すれば、一般市民の方に対しても周知ができると考えている。
会長	パネルディスカッションはいいとは思うが、人を集めないといけない。そのためだけに人を集めるのは、なかなか難しい。市主催のイベントなど、既に多くの人が集まるイベントの中にパネルディスカッションを組み込み、来場者に聞いてもらうのが効果的ではないか。活動を知らなかった人へ情報を届けることで、自分も始めようと思うきっかけになればいいと思う。 また、活動団体同士の交流が少ないため、これまでの活動団体のノウハウが団体の中だけに留まっている。ＳＮＳを活用し、気軽に情報共有できる環境を整備することで、他団体のノウハウが活用可能となる。ただし、高齢者にとってはＳＮＳは使いにくいイメージがある。
委員	私たちの団体ではラインを活用し、スケジュールを共有している。使えない方には別途連絡をしているが、ラインは便

	利で楽しい。 　また、みらフェスやいきいきふれ愛まつりなどのイベントに団体で参加し、寄せ植え鉢の販売や寄せ植え体験を実施しており、皆さんに存在を知ってもらえていると思っている。
委　　員	現状、横のつながりは全くない。我々のような審議会に参加しているものであっても、過去の市民提案型まちづくり事業の採択団体はそこまで知らない。 　新庁舎一階ロビーを活用し、多くの人に活動を見てもらえるよう活動を展示してはどうか。 　また、私自身は地域自治協議会でまちづくり活動をやっているが、他の地域自治協議会の情報を得る機会は少ない。こちらから他の団体が発信されている情報を確認し、良い取組を参考にして自団体の改善に繋げていきたい。現在、各団体が積極的に集まって情報共有できる場がない。今は自身の団体の活動を必死に行っているところではあるが、将来的には同じ目的の活動団体同士が寄り合える環境ができればいいと思う。
会　　長	情報発信の方法として、イベントだけではなく、常設展示という形式でもいい。何もしなくても流れてくる情報によって刺激を受けるという視点も必要ではないか。
委　　員	加古川には「かこむ」という情報発信のツールと場が一緒になったようなところがある。団体登録すると小さな会議室が無料で使え、まちづくり活動に関する情報や相談ができ、年に数回、利用者同士の交流イベントがある。小野市にも「エクラ」という似たような場所があり、みらいえをそのような場にできないかと考えている。普段からみらいえを利用している人や団体を繋げられるようなイベントや図書館の来館者や高校生などを巻き込み、繋がる場と情報が見えるようなイベントが必要だと思う。市民活動をする人だけではなく、こどもや高齢者、行政、企業の方も繋がるような場所で実施できればいいのではないか。
会　　長	コロナ禍で交流の形式が劇的に変わった。オンラインの交流だけでは本来の交流の意義を見失うため、対面の交流も必要である。オンラインの交流は情報共有を随時できるため、非常に便利である。オンラインの交流と対面の交流をうまく組み合わせて、団体同士が繋がっていくプラットフォームを構築する必要がある。オンラインの交流に関わるシステムはすぐにできると思うので、対面の交流に関わる仕組みを考えていかないといけない。

	また、ラインの交換は知り合いでないと難しいイメージがある。若い人はインスタグラムが交流しやすいのか。交流のインフラとしてどのような場があれば良いのか。先程話題になったみらフェスとはどのようなイベントか。
委　　員	みらいえで実施しているライブやダンス、ステージイベントやワークショップの開催、キッチンカーやまちづくり活動を実施している団体のブース出展など、様々な催しがあるお祭りのようなイベントである。播州織産地博覧会は市外からも多くの方が来場されるイベントで、みらフェスは市民の祭りであり、日頃の活動を披露するイメージのイベントである。
委　　員	若い世代に対してまちづくり活動を広げるためには、オンラインの交流は必須である。しかしＳＮＳは普段からお互いのことを知っている人でないと繋がることは難しい。相手のことが一番わかるのは対面の交流だと思うが、対面にすることは難しいと思う。どこで折り合いをつけるかが鍵となる。 今回の協議のなかで課題として考えている情報発信は外向けのことであり、活動団体同士の連携は内向けのことである。それを同時に解決させていくことが大事だと思うが難しい。まずは、内向けである活動団体同士の連携を強める必要があるが、そのためにはお互いの活動を知ることが第一歩になるのではないか。そう考えると、パネルディスカッションや市民提案型まちづくり事業審査会でのプレゼンテーション会のような交流できる場が重要で、そこまでいかないとしてもお互いのことが知れる方法がいいと思う。例えば、パネルを展示して写真や文字で知れる方法が、一番の落としどころだと思う。
会　　長	まちづくり団体の課題を、内側での交流と外側に向けた発信に分けて考えていただいた。外に向けた発信はすそ野の拡大に繋がるが、まずは内側である団体同士の交流や意識の共有がしっかりできていないと、外側に発信しても広がりが生まれないのではないか。また、内側での交流方法もオンライン又は対面の方法があるが、知らない人といきなりオンラインで交流するのは難しいと思う。対面の交流については、拠点のような場所を設けて、そこに各団体のパネルやチラシ置き場を設置しているイメージである。そこの会議室は登録された団体や補助制度採択団体であれば、無料で使えるようなインセンティブの検討はできないか。
委　　員	今まで「かこむ」や「エクラ」などをみてきたが、みらいえはその役割を担えると思う。「かこむ」では、みんなが

	「かこむ」を自分の居場所としており、利用回数も制限がなく、チラシも自由における。自然な空気のなかで繋がっていけることが大事なのではないか。
会　　長	この辺りで、事務局から今までの意見に対しコメントをお願いしたい。
事務局	居場所づくりについては、何らかの形で実施できる可能性がある。また、活動と展示の場の提供についても、市民交流施設やみらいえ、もしくは他の公共施設などを活用した巡回展示もひとつの方法であると考えている。地区の巡回展示には、地域自治協議会などにもご協力いただきながら実施できればいいと思う。
会　　長	展示するポスターなどは事前にひな型を用意しておき、活動団体からテキストや写真の送付があれば完成できるようなものが良いのではないか。もちろんひな型にこだわる必要はない。 オンラインの交流についてはどうお考えか。
事務局	各委員のご意見をお聞きしていると、オンラインによる交流はハードルが高い印象を受けた。しかし、オンラインであれば時間的制約等が少ないことを考えると、メリットがあると感じている。ただ、活発な交流を行うためのコンテンツなどは考えていく必要がある。
会　　長	オンラインで知らない人と繋がることに抵抗がある方も多いので、その抵抗が少なくなるようなツールがいいと思う。
事務局	個人名で登録するツールではなく、団体やグループで登録するツールであれば活用しやすいのではないかと考えている。
委　　員	実体験であるが、ＳＮＳでの情報交換が揉めごとに繋がったことがある。ＳＮＳでは箇条書きが基本となるため、相手に誤解を与えてしまうことがある。相手と仲間意識ができていない状態での意思疎通になるため、誤解が生じ、関わりが断絶したことがあった。一方通行となるＳＮＳはそれでいいと思うが、意見交換となる場合は、相手に誤解を生じないよう注意して取組まないといけない。
会　　長	親しくないもの同士の情報の伝え方によっては、本質ではない些末の問題が生じる必要があるため、使い方には注意する必要がある。 今までの意見をまとめると、活動団体同士の交流の場については、対面とオンラインの形式があるということである。 対面の形式については、交流できる場、その場所での展示、その場所が活動団体のインセンティブとなるような居場所を

	設けることができるかを検討。 　オンラインの形式については、人間関係ができていないもの同士のなかで、情報のやり取りが軽く、薄くできるようなツールを検討。 　次に、すそ野の拡大についてであるが、活動団体同士の連携を促進させ、また活動団体が発信するコンテンツを充実させ、多くの人を巻き込むためにはどのような方策があるか。こちらにもオンラインと対面の方法があるが、対面の方が重要であると感じる。対面の場所について、みらフェスが適しているという委員の方の意見があったが、他にもそのような場所があったらご意見をいただきたい。
委　　員	私が所属しているグループでは、みらフェス、いきいきふれ愛まつり、オリナスで実施しているルーフガーデンフラワー教室、黒っこプラザで実施している親子寄せ植え教室に出向き、活動を行っている。
会　　長	このようなイベントに他の団体も出向いてもらえばいい。またＳＮＳのプラットフォームができれば、そこで周知を行えばいいのではないか。知らない団体のためにリスト化することも必要であると思う。
委　　員	各団体によるイベントへの参加も、多くの人の集まりで参加する場合と少数のグループで参加する場合に分けられる。少数のグループでの参加の場合は、メンバーの想いが統一されやすく、物事もスムーズに進みやすい。一方、多くの人の集まりでの参加は、様々な人がいて、意見も様々ある。この集まりでの参加については、その集まりを運営する人のエネルギーが必要である。ただ運営する人にも任期があるため、エネルギーがある人の任期が終わってしまうと、次の人が頑張らないといけない。任期が終わった人がサポートし続けられるような体制ができたらいいと思う。
会　　長	非常に大切な指摘である。これまでの協議は、横軸がオンラインか対面かということであり、縦軸が団体の交流とすそ野の拡大であったが、その中間に活動の継承又は持続化という要素がある。６つのマトリクスがあって、オンラインか対面か、活動団体同士、活動を終えた人、活動をしていない人という区分で考える必要がある。
委　　員	活動団体には、それぞれ想いがある。それらの団体を繋げるには、ファシリテートが重要である。セミナーや交流会の開催を通じ、各団体が学びや気づきを得ることができる交流の機会を作らないといけない。

会　　長	ファシリテートは、団体同士で継承する場合や外へ発信する場合にも関係する話である。そのような活動を誰がするのかも含めて、具体策を考えて頂くこととする。
委　　員	様々な活動団体が気軽に交流や相談、情報発信ができる場を作ることが大事である。そういう意味では、みらいえはそのような場所に近い存在である。みらいえは普段から多くの子ども達が集まっており、行き慣れた場所である。そういったところでまちづくり活動をすると、子ども達は活動に興味を持つと思う。例えば昨日のみらフェスでは、消防署とＪＲが出展し、興味のある子どもはそれに触れることができる。未来をつくるのは子どもであるから、子どもに焦点があった活動ができる場所はとても大事である。
会　　長	次世代を担う子どもたちが、まちづくり団体に気軽に触れられる環境がいいと思う。今はハロウィンが流行っているが、昔は地域の地蔵盆や秋祭りがあったから、ハロウィンがここまで流行っていなかったのではないか。 まだご発言されていない委員の方に、今までの意見を聞いて感じたことなどご発言いただきたい。
委　　員	私が所属している団体も、子どもを対象にしたイベントを多く実施していて、それなりに人も集まっている。ただ、団体の目的を理解されている人が少なく、理解が進めば寄付金や賛助金がもっと集まると思う。団体の目的を広く理解いただくことが最近の課題である。
委　　員	前回の議論のなかで、会員の確保が難しいという話があったが、他の町に聞いても同じ悩みを持っている。魅力がないのかわからないが、個人では動けるが、団体のなかでは動きにくいような風潮が生まれている。また、多種多様な意見が出てきてまとまりがないように感じる。村では、子ども会があっても入らないなど、地域での交流を避ける人が増えてきており、心配している。
委　　員	活動をしていて、「交流」がとても大切であると感じる。地域自治協議会で色々と活動しているが、他のまちづくり活動団体の情報があれば活動が充実し、もっと交流に繋がると思う。また、様々な情報が集まっている場所をつくることだと思う。ただ、みらいえをそのような場所にしようという趣旨の発言があったが、自分の地区からは遠く、あまり関わっていない。どこの地域に交流できる場所を作るのか、どのような形で市内全域の団体の交流を図るのかが難しいと感じた。
委　　員	私は広報を見ることは少ないが、地区でのイベントのチラ

	シはよく見る。そのような情報発信の方法は効果があると感じている。多くの人に見てもらえるような広報となるよう工夫いただきたい。
委　　員	地域では情報が少なく、イベントなどの情報を知らない人が多いと感じる。回覧を活用して、一軒一軒知らせることも効果的ではないかと感じる。
委　　員	まちづくり活動団体が多すぎるので、もっと凝縮できないかと思う。また、助け合いの気持ちが大事であり、団体に対する市の支援も大事である。
会　　長	委員の皆さまから、色々な意見をいただき、答申に含める内容は多く出たと思う。先程申し上げた６つのマトリクスに当てはめ、様々な人の交流と広がりが生まれるプラットフォームづくりに向けて、オンラインと対面、地域バランスを考えながら検討する必要がある。
	５　今後の予定について
事務局	第４回まちづくり推進審議会の開催日程について説明
問合せ先	都市経営部まちづくり課